

## 稲垣達郎著『森鷗外の歴史小説』

## 三好行雄

B5判250ページ、浩瀚な大著とは呼べないが、著者のライフ・ワークとして書きつがれた森鷗外・歴史小説をめぐる論稿をまとめたにふさわしい重量感がある。生前の主要な歴史小説論が「森鷗外の歴史小説Ⅰ」「森鷗外の歴史小説Ⅱ」の二部に構成されている。

編集の方針については、編集を担当した竹盛天雄氏が巻末に付した「あとがき」に詳しい。――Ⅰは著者自筆浄写本……を底本とし、稲垣家所蔵の稿本、および早稲田大学図書館所蔵の副本（別筆）、初出のための原稿・校正刷・初出控本などを参照し、Ⅱは著者書き入れ控本を底本とし、原稿・校正刷の保存されているものについては、これを参照した。著者固有の表記や文字づかいを力めて尊重したことはない。Ⅰは〈著者の学位請求論文の根幹部〉で、著者自身が既発表の論文を補筆・再編集して体系化したもの。「緒言」について第一章「鷗外・歴史小説における代表的思想」（「阿部一族」「山椒太夫」を対象とする二節からなる）、第二章「鷗外・歴史小説の創作方法」（「はしがき」と「堺事件」「安井夫人」「栗山大膳」「ちいさんばあさん」を論じた四節に、「澧江抽簫」への道」を章のまとめに添える）が論の中枢をなす部分であり、最後に、第三章「鷗外・歴史小説の意味」が結論として概括され

ている。ⅡはⅠ以後に書かれた論稿から六篇、若干の編集を加えてまとめたもの。ちなみに、竹盛氏の「あとがき」は、Ⅱの編集の趣旨、経過だけでなく、Ⅰについても、初出その他と定稿との綿密な比較検討、〈内容把握にかかわる顕著な修訂箇所〉を例示し、〈異文関係〉を明示するなどの配慮がなされている。氏の編集がいかに周到な用意のもとになされたかが窺える。

著者はⅠの〈緒言〉で、鷗外の歴史小説の思想的なものの抽出と、その独自性を支える創作方法の特質と展開を説明するという意図を明らかにし、第一章が鷗外の顕著な思想の特性を論じることに当たっている。『阿部一族』と『山椒太夫』に通底する思想として指摘されるのは〈超合理精神〉の肯定である。『阿部一族』は「その虚無感」というサブタイトルが示すように、人工の封建制という自然の前の人間のむなしさがいわれているが、それとも、もともと殉死という〈絶対者に対する超批判と超合理精神〉によって支えられている〈精神の情と義と意地に翻弄された帰結〉なのである。氏のいう超合理精神がより明確に語られているのは『山椒太夫』論である。鷗外の関心が〈粟の鳥を逐ふ女〉から安寿へ移行し、また、安寿は少女の献身というテーマにおいて「最後の一句」のいちと強い近親関係にあること、そして、いちと安寿の決定的な違いは安寿の〈守本尊への絶対の信頼感〉にあり、そうした超合理主義精神が鷗外の〈精神構造のなかに深く内在していた〉ことが指摘されるのである。

Ⅰの白眉は第二章の創作方法論で、論の基底としてもっとも重視されるのは、鷗外自身が自己の歴史小説、とくに『山椒太夫』

の方法について語った脚註『歴史其儘と歴史離れ』である。歴史其儘と歴史離れが交互に傾斜をくりかえし、また、平行して書き継がれながら、やがて『澀江抽簏』の史伝の世界にいたるといふのが、著者の体系化の前提である。著者によれば、鵬外は『山椒太夫』で急激な歴史離れを遂げたのではない、『山椒太夫』以前の実作の過程を通じて徐々に形成され、一定の段階において歴史離れへの〈捨身〉があった。そして『安井夫人』において、鵬外は明確に歴史離れを選択しはじめた。その〈一定の段階〉に達した記念碑と見做されるのは『塚事件』である。

『塚事件』論だけに限ったことではないが、著者はまず鵬外の抛った典拠を確定し、その資料との綿密な比較・考証を通じて、鵬外が原拠から歴史の自然の契機ないし条件を抽出するという形で単純化し（『塚事件』では記録者の評価を削除して、客観的な事実の自然へ還元する作業としても説かれる）、素材に描写の要素をくわえて小説的風景化し、さらに〈思量のメカニズム〉を働かせて素材の空隙を埋め、みごとに芸術形象化を施すという鵬外固有の創作方法を明らかにしている。その間、著者の恵まれた文学的感受が、たとえば作品造型の細部に的確な批評・鑑賞を加えることで、論の奥ゆきを深くしている。『塚事件』に対する著者の批判のひとつに、事件の背景（国際情勢など）についての記述不足の指摘があるが、それは鵬外の歴史の資料から抽出した条件への徹底した服従を示すものとされ、その服従が〈歴史の縛〉をより強く感じさせる動因となつて（著者は〈小説への誘惑〉という言葉も用いている）、『安井夫人』による〈歴史離れ〉の実践がはじまつたと見做され

る。『安井夫人』の歴史離れはとくに佐代の形象化について指摘されるが、同時に、仲平に關して歴史其儘の残痕と、主人公の内部への踏み込みの不足が批判される。歴史離れと歴史其儘を一篇の小説として統一しようとした鵬外の試みの挫折であり、それを其儘と離れにわたる〈よろめき〉としてという著者の論理は説得力がある。『栗山大膳』の歴史其儘についても、あざやかな資料操作を評価しながら〈小説・非小説にからまる根本的態度において不確かなものがあつたために、結果としては、一種ゆがんだ作品とならざるを得なかつた〉という結論が与えられる。第二章で、歴史離れの例として論じられるのは「ぢいさんばあさん」だが、たとえば、んの再奉公の原因から生活的な困窮が削除される。著者はそれをヒロイン像の奥ゆきを失い、歴史の条件を回避する作爲と見做し、つまり〈歴史離れすることのなかに回避がある〉と説く。著者が論の根本に据えた『歴史其儘と歴史離れ』について、著者はつぎのように説く。『塚事件』論から——〈歴史の自然を重んじるということとは、個々の現象（史実）のなから契機を抽出し、それらを基底として、新たに歴史の自然を創造することである〉。その自然をめぐる、『歴史其儘と歴史離れ』の書かれる前後、鵬外の歴史小説は其儘と離れの二極にゆれうごく動揺として、捉えられる。その場合、鵬外は徹底して、非合理の排除と抽出した契機への無作爲を貫き、自然の契機に服従しようとした。歴史離れもまた、自然に關わる方法の基本において背反的ではなく、〈歴史の自然を形成するにあつた契機を、能うかぎりささやかなものに限定した〉と見做される。鵬外の〈虚構は、もっぱら

歴史の自然へのものであり、主観の無軌道な跳梁による歴史の論理の破壊（同時に、芸術の論理の破壊）とはなっていない）、歴史其儘と歴史離れは、共に歴史の自然への方法」だったのである。

では、鵬外自身のまったく解説するところのなかつた「歴史の自然」とはなにか。第三章から——「歴史の存在としての、また運動としての合法則性をいうのであろう。……それゆえにこそ、ほしいままな「虚構」の跳梁は許されないのである」。その歴史の自然の充足への徹底が鵬外の歴史小説における文学精神であり、したがって、『歴史其儘と歴史離れ』自体、それに徹し切れなかつた鵬外のへよろめきの告白であり、『山椒太夫』以下の作品行動は、そのよろめきのもっとも露骨な現れである」ということになる。鵬外はそのジグザグの過程を経て、『濠江抽齋』によって在るべき歴史其儘の軌道にはじめて乗り、ことば通りの歴史小説を創造できたというのが、著者の結論である。

この書評が著者の目に触れる機会は永久に失われている。だとしても、オマーージュに終始するのは、書評としてかえって非礼かもしれない。ただし、これは批判というのではなく、むしろ質問である。「歴史離れ」の具体例として『ちいさんばあさん』が選ばれたことも関連するが、『山椒太夫』で典拠の残酷な復讐劇が奴隷解放といったふうな収束に改められていること、これは『山椒太夫』の歴史離れとしてどう位置づけられるのだろうか。私見では鵬外という歴史の自然は、特定の歴史の時間を生きる人間の行動と心理を決定するものというふうには理解したい。著者にも、鵬外と菊池寛を比較した箇所、細川忠之は再編成された近世封

建制下の人間であり、忠直卿は大正デモクラシー下の人間であるという規定があつた。復讐の機会を得た厨子王がもっとも残酷な形で、目には目をの報復を山椒太夫に加えることこそ、中世を生きる人間にとって、まさしく歴史の自然と呼ぶにふさわしい行爲ではないだろうか。黒人問題とのアナロジイという合理化を恐れなかつた鵬外にとって、歴史の自然とはなんであつたか、というのがわたしの疑問である。

Iにかかわりすぎて、IIについて触れる余裕をほとんど失ってしまった。著者の語りくちはいっそう円熟をきわめ、論理の運びにも晦渋さがなく、文体もまたのびのびと屈託するところがない。まさに円熟した「芸」のみごとさを思わせる。ジェネアロジックな可能性の発見が伝記の新しいスタイルへの発想を決定したという指摘や、原資料の一端をとりあげて、鵬外の「資料吸収の為方の特色」を明らかにする——つまり細部において全体を彷彿する方法的示唆など、やがて著者によって書かれるはずだった『濠江抽齋』論の全貌に終ったことはかえすがえすも残念である。著者のがついに未完に終ったことはかえすがえすも残念である。著者の論の運びは決して奇を衒わない。なによりも、言葉・テクニカルチームのひとつひとつが、著者自身の思索に裏付けられた、概念のゆれのない的確さで付置され、領域のひろい世界を完成している。目下、若い世代に流行の、今出来の、外国産の、時に誤解に基づく不確かな概念のチームなど、かけらもないのである。文学研究の根源とはなにか、という基本についても示唆するところの多い好著である。（平1・4 岩波書店 B5判 二八七頁 二四〇〇円）